

四、明治二十一年石川県衛生一覽表について

石川県金沢市 橋本 和夫

五、北陸に於ける医の郵便印

京都府長岡京市 石原 理年

六、鳥巢道人謙斎著「医療手引草」について

石川県金沢市 山田 祥二

七、金沢医学館卒業生について

石川県金沢市 寺畑 喜朔

八、西尾幾治『看護婦養成の実際』(一九三九)について

大阪府豊中市 長門谷洋治

〈特別講演〉

北陸の漢方典籍―医史的考察

石川県金沢市 多留 淳文

例会記録

六月例会 平成四年六月二十七日(土)

順天堂大学医学部九号館一番教室

一 足立長傳訳「産科礎」の原本

蔵方 宏昌

一 ビデオ鑑賞「テレビノンフィクション 鷗外の敗北」

KBC九州朝日放送制作

九月例会 平成四年九月二十六日(土)

順天堂大学医学部九号館三番教室

一 ルイ・パストールの九月

大村 敏郎

一 中国本草の受容史

真柳 誠

紹介

新村拓著『老いと看取りの社会史』

著者は本学会々員であるが、早稲田大学大学院を出た歴史学者である。既に『日本医療社会史の研究』『死と病と看護の社会史』等の単行本を刊行して世に問うている。今回のこの書もこれまでの研究を踏まえて、近年わが国で大きな問題となりつつある「老いと看取り」を社会史的観点から取り上げたものである。月刊誌「総合社会保障」に一年間連載したものをベースとしてまとめたといわれる。

この本の章立ては次の通りである。第一章、老いを迎える年齢、第二章、前近代社会における老いの評価、第三章、老いと病、第四章、老人介護を支える孝の論理と仏罰、第五章、老いの生活規範、第六章、近世の医書『病家須知』にみる看護、第七章、近代の家庭看護と斎家論。

まず通読した感想を述べさせて頂くと、内容が甚だ盛り沢山で読むのに骨が折れる感じである。古記録、歴史書、文学書、医書等から博引旁証の資料が次から次へと出て来て、著者の言いたいことがどの辺にあるのかわかり難い感みがある。著者は「あとがき」では次のように述べている。

「古代から現代に至る老い観と死生観の変遷を、老いを看取る人、看取られる人の双方の立場から辿ることを試みたが、